

**TOMO
DACHI**

SoftBank
Group

**TOMO
DACHI**

SoftBank
Group

TOMODACHI サマー・ソフトバンク・リーダーシップ・プログラム

Impact Report

Impact Report

SINCE 2012
1000 Alumni

若い世代への投資が 東北の力になる

プログラムを始めた2012年
町にはまだ瓦礫が残っていました。
避難によってコミュニティは分断され、
眼に見える課題も、
見えない課題も山積みでした。
そのような状況の中、初年度は300人、
それ以降は毎年100人の高校生が3週間渡米するという
大掛かりなプログラムを立ち上げたのには、
若い世代への投資こそが、
東北の、しいては日本、世界の力になるという
強い信念がありました。
教育プログラムの成果は、
長期的な視野に立ったときに
本当の成果が見えてくるものだといいます。
2012年から実施してきた本プログラムの、
今明らかになるインパクトを紐解いていきます。

協賛企業



16歳で渡米して新しい文化に触れたこと、
カリフォルニア大学バークレー校で学んだことで、
私の人生は大きく変わりました。
チャレンジすれば、未来を変えることができます。

ソフトバンクグループ株式会社 代表取締役 会長兼社長執行役員 孫 正義

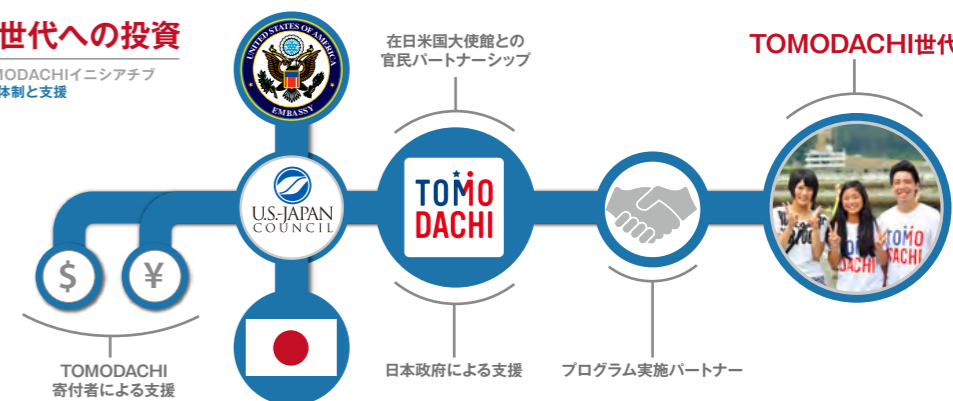


TOMODACHIイニシアチブについて

東日本大震災後の復興支援から生まれ、教育、文化交流、リーダーシップといったプログラムを通して、日米の次世代のリーダーの育成を目指す米日カウンシルと在日米国大使館が主導する官民パートナーシップで、日本国政府の支援も受けています。日米関係の強化に深く関わり、互いの文化や国を理解し、より協調的で繁栄した安全な世界への貢献と、そうした世界での成功に必要な、世界中で通用する技能と国際的な視点を備えた日米の若いリーダーである「TOMODACHI世代」の育成を目指しています。

次世代への投資

TOMODACHIイニシアチブ
組織体制と支援



インパクトレポート

TOMODACHIサマー・ソフトバンク・リーダーシップ・プログラム

Contents

- TOMODACHIイニシアチブについて P2
- プログラムについて P4
- 米国研修提供者インタビュー P6
- プログラムが与えたインパクトとは? P7
- アラムナイアンケート調査 P8
- アラムナイ座談会/インタビュー
 - プログラムが人生に与えた影響 P12
 - これからの10年の東北を考える P14
 - プログラム→イマノワタシ P16
 - つながり続ける同期の絆 P18
- 今も続く、アラムナイの絆 P20
- 感謝を込めて(Special Thanks) P21
- あとがき P22

東北の次世代のリーダーを、育成する。

本プログラムでは、東北の次世代を担う高校生たちがアメリカに渡って地域貢献とリーダーシップを学び、帰国後はそれぞれの地域でアクションを実施します。



参加者 福島・宮城・岩手からの高校生 毎年100人 <small>※2012年のみ300人</small>	場所 ソフトバンクグループ創業者 孫正義も学んだ UCバークレー <small>(カリフォルニア大学 バークレー校)</small>	期間 渡米3週間
--	---	---------------------------

2012年より1000人のアラムナイを輩出

2012年のプログラム開始以降、高校生が参加し、プログラムの卒業生(アラムナイ)はのべ1000人にもなりました。大学生や社会人になったアラムナイが後輩たちのアクションをサポートする等、世代を超えた繋がりも生まれています。

STEP 1 Y-PLANを学ぶ

グループの結束力を高めるワークショップや、自己のストーリーを掘り下げ、共有しながらリーダーシップのあり方を考える等、座学ではなく、ディスカッションを中心とした講義によって、多様なリーダーシップスキルと社会貢献の手法を学んでいきます。

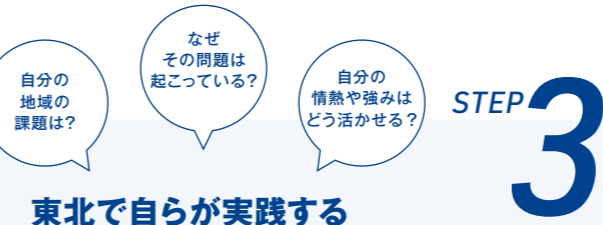
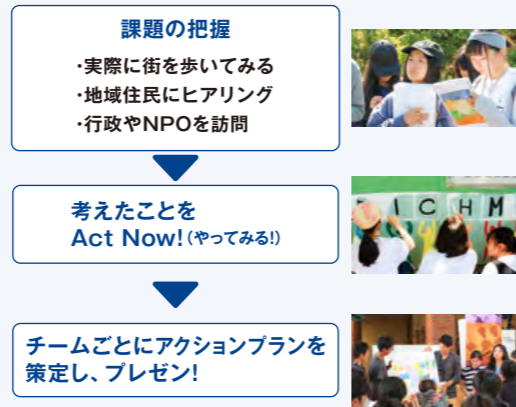


STEP 1

STEP 2 Y-PLANを用いて、現地での地域活性化プロジェクトを考える

Y-PLANの手法を、アメリカの地域を舞台に実践してみます。チームごとにフィールドワークを行い、地域の課題を把握し、地域活性化プランに落とし込みます。最後には関係者の前で自分たちが考えたプランを発表します。

テーマ カリフォルニア州自治区の地域活性化プロジェクトを考える



STEP 3 東北で自らが実践するアクションプランを考える

これまでの学びを基に、自分自身や地域について考え抜き、高校生自身が地域で実践するアクションプランを策定します。最後には、想いの詰まったそれぞれのアクションプランをパネリストに向けて発表します。



アダルトアライがサポート!
アダルトアライとは：NPO職員等、東北地方で活躍する大人たち



ユニークな発表がたくさん!

その他、滞在中にはアメリカで活躍する日本人や若手起業家との交流、ホームステイや野球観戦といったアメリカ文化を体験するアクティビティが盛りだくさん!

帰国後

アクションプランを磨き、実践! 最終報告会で発表!

帰国後は、実際に自分の地域で実践を積み重ね、アクションプランに磨きをかけていきます。数ヶ月の実践期間を経て、最終報告会で自分のプランを発表します。

実際に行われたプロジェクト

- 震災体験を次世代につなぐため、団体を立ち上げトークイベントを実施!
- 高校生自身がガイドとなって地元の魅力を発信するツアーを企画!
- 子どもたちに防災を伝える教材として、紙しばいを制作!

Y-PLAN について

Y-PLAN (Youth-Plan, Learn, Act Now) は、カリフォルニア大学バークレー校の Center for Cities+Schools によって開発された課題解決型のワークショップです。若い世代が地域の課題を自身の視点で発見し、解決や活性化の為にプログラムを立案、実行します。この経験を通して、地域貢献やリーダーシップスキルを学びます。



米国研修提供者インタビュー

—— プログラム参加者は、プログラム中Y-PLANを学び、取り組みます。Y-PLANと、このプログラムのゴールについて教えてください。

Y-PLAN (Youth - Plan, Learn, Act Now) は、カリフォルニア大学バークレー校Center for Cities + Schools (CC+S) のDeborah McKoy博士によって開発された、受賞歴のある学習方法です。Y-PLANは20年以上にわたって、コミュニティの問題解決に必要なツールやプラットフォームを若者に提供することにより、彼らをまちづくりの中心に引き込んできました。

Y-PLANは、「Why Plan? (なぜ計画するのか?)」にもかかっている言葉遊びでもあります。この方法論は、若者や大人に対して「なぜ現状がそうなっているのか」「どうすれば改善できるのか」と問いかけ、現状打破を促します。

—— 東日本大震災の後2012年に本プログラムが東北の高校生を対象に開始され、10年が経ちました。ご自身から見て、このプログラムの意義は何ですか。

このプログラムは、2011年の東日本大震災後、東北の若者たちがふるさとの再建・再開発にあたり、どのように変化の担い手になり得るかという点で新しい文脈を生み出しました。

毎年、参加者たちはカリフォルニア大学バークレー校でのプログラムに参加し、ベイエリアで実践的なコミュニティ開発に関わることで、様々な新しいスキルを学びました。例えば、参加者はチームになって、批判的かつ総合的に考える練習をします。同時に、地域の課題や、地域の市民リーダーとの協働方法について学びます。参加者たちは、北カリフォルニアのコミュニティをよりよくするためには何が可能か、という問いに対して、データとアイデアを集めました。これらを東北での自らの体験に応用し、自らの地元をよりよくするためのアクションプランを策定しました。交通手段不足や住居不足の問題から、被災地におけるあらゆる世代の社会的つながりの必要性まで、参加者たちは複雑な社会問題の改善に取り組みました。

—— これまでに本プログラムに参加した人は1000人にのぼります。将来、どのようにこのプログラムの成果が発揮されることを期待しますか。

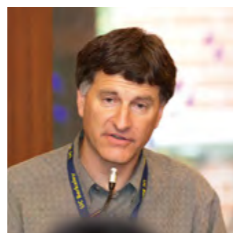
このプログラムに参加した東北の素晴らしい若者たちが、将来にわたってリーダーシップの道を歩み続けてくれると確信しています。

—— プログラム参加者へ伝えたいことはありますか？

バークレー校でのプログラムに参加してくれて、ありがとうございました!皆さんは多くの才能と深い洞察力をアメリカへ持ってきてくれて、私たちが皆さんから学び、恩恵を受けました。帰国後もみなさんがプログラムの学びを活かしてくれることを願っています。



Deborah McKoy
カリフォルニア大学バークレー校
Center for Cities + Schools、
設立者兼エグゼクティブ・ディレクター



David Beiser
Global Seed、設立者兼CEO



プログラムが与えた インパクトとは？

2012年に開始したプログラムの
アラムナイはのべ1000人にもなる。

高校生という多感な時期に渡米し、
濃密な3週間を過ごした経験は、

彼らの人生にどのような影響を与えたのだろうか。

プログラムに参加したときから、

彼ら自身も、東北のまちの姿も変化した。

彼らは、それぞれの「イマ」の視点から、

どのような東北の未来を思い描くのだろうか。



アラムナイアンケート調査

プログラムから多くのことを吸収し、高校を卒業して次のステージに進んだアラムナイたち。
一人一人にまかれたリーダーシップの種は、どのように彼らに根つき、そして社会に向けて開花しているのでしょうか。
アラムナイを対象に行ったアンケート調査から紐解きます。



グローバルリーダーシップスキルは身についた？

プログラムで学んだ
リーダーシップスキルが
評価されたことがある

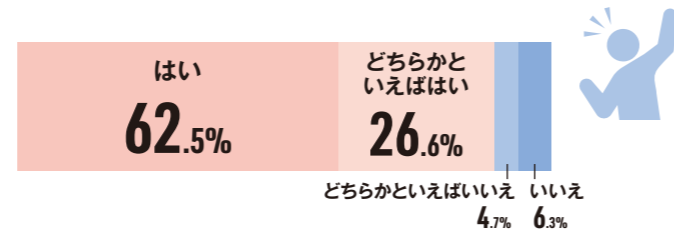


※「はい」、「どちらかといえばはい」の合計

初めてのことにチャレンジするハードルが低くなった。
自分の行動で周りの大人を巻き込んでいけることを学んだ。

リーダーシップや、コミュニティ形成(チームビルディング)について、仕事の中や地域コミュニティの中で非常に活かしている。

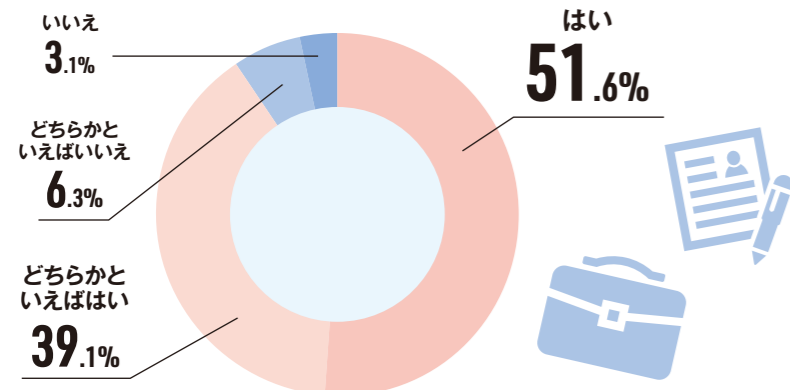
プログラムで学んだリーダーとしての考え方
(「リスクを取ること」「正しい答えはない」)を、
帰国後の日常生活で活かしている※1



積極的に自分から手を上げて意志を表明したり質問をするなど、
周りの何もアクションをしない雰囲気にもまれることなく行動ができるようになった。

帰国後は、自信に満ち溢れ、
行動力や何かを行う際の決断力が増していた。

プログラムで学んだリーダーシップスキルを
進学、就職に活用した



プログラム中は、思うように発言や行動に移せないことがあったが、帰国後は、一緒に行った仲間の行動を自分と重ね合わせ、リーダーとして活躍できたと自負している。その経験が自分のアピールポイントとなり、就職活動で第1志望の会社に内定できた。

高校浪人をしてた私が、高卒認定試験を受け、
現役で大学に入学できました!

地域貢献への探究につながった？

東北でアクションプランを
実践した



※「はい」、「どちらかといえばはい」の合計



地域にはなにもないと思っていたが、
アクションプランを地元でやっていくうちに、どんどん物事が動いて、地域が盛り上がってきた。今では自分にも後継者ができて、地元を盛り上げてくれています。

プログラム後の活動を通じて、多くの地域の方と知り合い、
課題を見つける事ができた。またその課題解決に向けて関わる事で、より地域のことを知る事ができた。

アクションプラン以外に、地域(東北)に根差した活動を行った
または友人、知人のアクションプランや地域貢献活動を手伝った



※「はい」、「どちらかといえばはい」の合計

積極的に、地元の団体などに所属し、
プロジェクトを任せられた!

私は震災があつてすぐ地元を離れたので、他の参加者と同じような東北への貢献は出来なかった。なので、自分しか出来ない貢献の仕方を模索した。

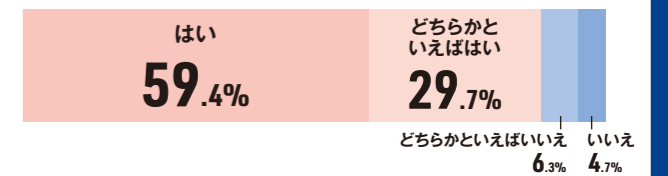
同年代だけでなく、
異なる世代と協働した※2



※「はい」、「どちらかといえばはい」の合計

地域で活動することで、町の大人に知り合いが増え、町で活躍する人たちとお話する機会が増えました。

現在または将来、
東北へどのように貢献したいか
想いや考えがある



国際社会への関心は高まった？

プログラム参加後に、海外へ行った
(長期、短期、留学、旅行含む)



海外大学に進学した。

自分の地元に限らず、世界の地域にも興味を持ち、
貢献出来るようになりたいと思うようになった。

新型コロナウイルスの影響で
行けなかったが留学予定だった。



※1 元の質問: プログラムで学んだ「リスクを取ること」「正しい答えはない」という考え方を、帰国後の日常生活でいかしたことがある

※2 元の質問: 実践共同体の考え方をもとに、同年代だけでなく、異なる世代と関わりをもった

調査概要 回答数:64

プログラム参加年	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
人数	7	2	4	3	7	17	13	11

プログラムは、あなたの人生に
どのような影響を与えましたか？



石川 理那さん
2012年参加

震災で何もできなかったもどかしさや、
自分には誰かのために何かできる
力が無いという思いを変えられました。

「なんでもできる」

と思い、動くことに恐怖がなくなった。

このプログラムの期間内には人間的にうまく
成長できなかったが、ここでの悔しさは後に活きた。

志をお互いに見つめながら
共に生きていく仲間ができた。

そんな仲間って、存在するんだ!
思えたことは財産です。

同世代で真剣に社会について
考えてる人がいるんだ!と思えた。

プログラム後、日本の外国語大学に入学し、
大学在学時に1年間留学を経験しました。
卒業後も、自身の目標通り海外で就職し、
高校生のときの夢を叶えることができました。



佐藤 風紗さん
2014年参加

このプログラムに
参加しなかったことを
想像できないくらい、
今の生活に影響している。

自分の個性とか
原体験を振り返る時、
必ずここでの体験を思っ

プログラムに参加したことで、
地域との関わりはどのように変化しましたか？

自分も地域の一員であり、
地域を引っ張っていく一人だと
強く意識するようになりました。

地元に戻って就職することは当初全く考えていなかったが、
現在は地元で海外と関われる方法を模索中です。



菊地 鈴音さん
2018年参加

田舎や地方に対して、
自分が知らないことだらけだと気づけたし、
自分という
小さい単位から変えていける
コミュニティが身近にある
ことに気づけた。

自分一人の力で何かを
変えることはできないと
思っていたが、
私の考えに共感し、
理解してくれる人がいると
気づくことができた。

自分の自慢できる地元になりました。

このプログラムに参加していなかったら多分、
自分がただ帰省する場所になっていたと思います。

帰国後、いざ出身地の被災地に関わろうと
取り組もうとはしました。しかし関わりたいと
思う気持ちと、関われない気持ちが
自分の中で葛藤していることに気づきました。

もっと地元が好きになったし、
誇りを持てるようになった!

プログラム参加後から現在までに、東北で起こしたアクションを教えてください。

「台風十号つながる募金」
を立ち上げ、50万円ほど
集めることができました。



岩田 萌さん
2016年参加

東北見聞の旅という
東北を旅する企画をたて、
自分ができる
まちづくりを模索し、
団体を立ち上げた。



城田 空さん
2018年参加

写真好きのアラムナイの
友人と一緒に、男子向けの
成人式前撮り企画を行った。



早坂 峻輔さん
2017年参加

様々な企業タイアップのもと
地元へ観光客を呼び寄せ
活気を取り戻す活動を
行った。2014年以降も
卒業生として、
現役メンバーの
サポートを行った。



田部 翔太さん
2012年参加

大学に進学し、
コロナで友人と会ったり、
旅行に行くこともできないという時に、
オンラインで海外の人と
日本料理を作って交流する企画を
立ち上げました。



阿部 千夏さん
会津 有美さん
2018年参加

福島県いわき市で
高校生が地元の良さを
発信するツアーや、
高校生を対象にした
イベントを行い、
若者の輝きを日本中に
発信しました!



高田 駿佑さん
2016年参加

プログラムが人生に与えた影響

——早速ですが、プログラムに参加したことは、今学んでいること、ご自身の考え方などにどのように影響していますか？

中鉢：私は高校1年のときにプログラムに参加したんですけど、ホームステイでレスビアンのカップルの家に行くことになったんですね。それをきっかけに、今大学では文化史学科というところで、差別や偏見はどういう歴史から来ているんだろうということを勉強しています。

西村：僕は、東北っていうものにアイデンティティを持ったのが、このプログラムで初めてだったのかなって思っています。福島・宮城・岩手の3県の高校生が集まる機会なんて初めてだったので、そこで話をしてみると、自分って「福島」の人間なんだなってすごく感じたし、プログラムで知り合ったあの人がいる地域だって思うと、東北全体に愛着が湧きましたね。

吉田：すごくわかります。プログラムを経て、地元への愛着は強くなりましたね。私、郡山の高校だったんですけど、震災前の地元は大熊なんです。原発から1キロ圏内の。それって、当時なかなか自分からは言えなくて……。

西村：そういうのも日本から遠く離れたアメリカだからこそ話せたっていうのもあったよね。

アメリカで行動して「できた!」という成功体験

小野：プログラムの最初に、「Yes, and~」っていうのをやったじゃない？まずは否定せずに受け入れるっていう。小さな声かけかもしれないけど、「自分から自分のこと話していいんだ」って思えて嬉しかったのを覚えています。その環境に3週間どっぷり浸かったことで、その感覚が染み付いたと思いますね。

西村：やったよね。「Where I am from~」とかね。プログラムでは自分のこと話せる雰囲気はあったよね。

小野：中学校までの自分って、いわゆる優等生というか、大人や先生の評価軸で「よいとされてることをやる」っていう感じで、自分が何が好きかっていうのもわからなかったんです。プログラムに行って、自分が今何やりたんだろうかっていうのを、常に考えて、違和感に気づくってことができるようになった。これが、プログラムに参加して得た、一番大きな力だと思う。

菅野：相手の意見を否定しないっていうのは、今もインターンなどで役立っていると思いますね。

吉田：プログラムで、「すぐ行動する」っていうのもやったよね。思いついたらまず動く、みたいな。それは身に

ついたよね。

中鉢：それを、大きな社会の中で自分一人が動くと大変だけど、100人っていう社会の縮小版の中でトライアルできたんですね。もちろん助けてくれる人もいて。そこで一度成功したら、現実世界でもできるんじゃない？っていう気持ちにさせてくれるんですね。

小野：私も同じですね。帰ってから、プログラムをきっかけにいろんなまちづくり系の団体に入って活動してんですけど、必ず手を差し伸べてくれる大人がいたり、動けば誰かが助けてくれるって信じられたのが、私が活動を続けてきた一番の理由ですね。

東北のために、それぞれの距離感でできること

——今、東北に対して何か活動をしていますか？あるいはどんな思いを持っていますか？

西村：僕はプログラム後から東北復興新聞というところで、ライターとして、同世代の東北への想いっていうのを伝えてきました。あとは、震災から10年目のときに、「Here I am」っていうドキュメンタリー映像を制作したりとか。突き詰めて考えると、震災があって、いろんな事情をかかえながらも、まちをもっとよくしたいとか、

こんなふうに住きたいっていう思いをもった人との出会いが、自分には一番の学びだったんですね。そんな彼らと、自分は出会ってしまったんだから、伝えなきゃっていう。それに、何を伝えるか、もあるけど、誰が伝えるかっていうのもあると思うんですよ。福島に生まれて、震災を経験して、このプログラムに参加した僕にしか伝えられないその人の姿を伝えるのが、自分の使命なんじゃないかって。

吉田：私は、大学を卒業したら地元に戻って公務員になりたいって思っています。東京に来てから、地元に戻るたびに、地元いいなあっていう思いが強くなって。今、前に住んでた人はほとんど大熊にいない状態なんですけど、自分も加わってまちを取り戻したいなって思いがあります。

菅野：今、インターンで福島の小高に関わっているんですけど、インターンが終わっても関係を持ち続けたいって思っています。小高って移住者や、自分がやりたいことをやってる、ちょっと変わった大人たちが集まっているんです。そういう人たちがキラキラして見えて、純粋に楽しんでいますよね。

小野：大学に入った頃は、絶対福島に戻って、何か大きなことをしてやろうって思ってたんですけど、最近はそうじゃないなって思っています。これまで、大学で出会った友達とか、20人以上を地元で連れて行って、高校生

のときに活動してて親しくなった大人に会わせるっていうのがライフワークになってるんです。もし自分がどこで働いていたとしても、福島はとてもおもしろい所なんだよって伝え続けていくのが、地元のためになるんじゃないかなって思っています。

中鉢：私は、プログラム後に語り部の活動をはじめたんです。プログラムで会おう子も、当時周りで語り部をしていた子も、みんな被害の度合いが大きい子ばかりで、それに対して私は仙台に住んで、震災の時に大きい揺れを感じた以外はいたって平和に生きて。でも、そんな私が震災を語っちゃいけないわけじゃないよなって思ってたんです。むしろ、あの時テレビでしか震災を知ることのできなかった人と同じ目線で、伝えられることもあるんじゃないかと思って。被害を受けた受けていないじゃないかって、震災に対して何を感じているかっていうところを、伝える活動をできたらなと思っています。

西村：被害の度合いに関わらず、その人ならではの距離感で発信できることって必ずあるよね。自分は被害を受けていないからっていう理由で発信をやめることこそ、東北のためじゃないなって僕も思う。

5年10年経って生きてくる出会い

中鉢：プログラムで出会った人には、自分の思ってる

こととか活動してることを素直に話せるんですね。ちょっと大きい夢を語ったりしても、バカにしたりしないし、それいいね!って言ってくれる。私にとってこのコミュニティは、学校の友達とも家族とも違う、サードプレイスになっていますね。

西村：東北の地域とか学校で無数に埋もれていた熱量の高い人たちを、このプログラムが吸い上げて、出会う場所を作ってくれたと思うんですよ。そのコミュニティが、5年10年経って生きてきていて、これからもっと大人になっていくと、東北にはアラムナイが作る星座みたいなものができてるのかなって思いますね。

——想像しただけで勇気になりますね。ありがとうございました!

—— another point of view

心理的安心感を生む場作り
絶対に否定しない、誰かが話し始めたら全力で聴く…プログラムのはじめにルールを設定していた。また、「みんなが違って当たり前」というアメリカのカルチャーのなかで、何を言っても受け入れてもらえるという安心感をもって、絆を育んだ。



西村 亮哉さん
福島県出身 歌手・大学生
2014年参加

小野 翠さん
福島県出身 専門学校生
2014年参加

吉田 真美さん
福島県出身 大学生
2017年参加

菅野 采颯さん
福島県出身 大学生
2017年参加

中鉢 乃杏さん
宮城県出身 大学生
2017年参加

これからの 10年の東北を考える

地域に根をはる アラムナイたち

—— まずはみなさんがどんなことをされているのかと、みなさん同士のつながりを教えてください。

山根：僕は宮古の高校を出てから専門学校でグラフィックデザインを学び、今はフリーランスでやっています。吉浜とは、仕事として一緒にプロジェクトをやる間柄です。この前は、地元の酒蔵の商品をプロデュースして、自分がラベルデザインを担当しました。

吉浜：僕は宮古市の地域おこし協力隊として、関係人口創出をメインに取り組んでいます。それと副業的に、地域企業に伴走支援に入って、そのアウトプットとしてクリエイティブの仕事につなげるっていうのをやっています。

井上：僕は東北の食べ物とか風景が好きで、岩手大で農業経済を学んだあと、地域振興とか地域づくりに関わりたいと思い、滝沢市の市役所に入って今年3年目です。

熊谷：私は今、岩手県立大の4年生です。今は休学して、一般社団法人いわて圏という関係人口創出や高校生の伴走をやっているところでインターンしています。前に、滝沢市役所でアルバイトしていた時期もあって、井上さんの隣の部署でした。

井上：わざわざ市役所でアルバイトするなんて変わった子だなと思ってたら、やっぱりアラムナイだった(笑)

自分の資源をどう生かすか 意識したのはプログラムが最初だった

吉浜：井上さんは、山根さんと一緒にアクションプランやってたんですね。

井上：トゥモロープロジェクトっていうんですけど、僕は盛岡出身で、岩手の中でも内陸側だったので、沿岸部の被災の状況とかって、あまりわからなかったんですね。このプログラムに参加して沿岸部の高校生と話して、こんな経験してたんだって初めて知ること多くて、

山根：当時岩手出身の参加者が16人いたんですが、沿岸部と内陸部の高校生がお互いの活動を知らない。これって広い視点で見ると、岩手そのものの課題じゃないかと思って、今地域はこうなって、こんな活動している高校生がいます、って伝える広報誌を作ったんですね。

井上：そのときのロゴも山根に作ってもらったよね。当時からデザイナー的な役割だった。

山根：もともと絵を描いたりするのは得意だったんですが、その自分の資源をチームにどう役立たせるとか、**地域でどう生かすかっていうのを意識したのは、プログラムが最初でした。**

アラムナイ同士は 余計な言葉がいらぬ

—— 今のお仕事や活動は、プログラムに参加したことが影響していますか？

井上：Y-PLAN で実践したような、高校生自身がアクションを起こして、それに対してフィードバックを得て、っていう一連の流れを体験できるって、ものすごく大きいことだあって、後々になって思い知ったんですね。これを**アメリカからできた、じゃなくて、地域でもできる**場があれば、まちづくりに大きな力になると思うんです。市役所の日常業務としてはなかなか関われないんですけど、プライベートでこういう場(会場となっているワーキングスペース、高校生のまちづくりの活動拠点にもなっている)にふらっと来て、高校生と話したり、いろんな活動に顔出ししたりしてます。

吉浜：当事者意識は必然的に高くなりますよね。僕が宮古に U ターンしようと思ったのも、**ただそこに当事者意識があったから**ってうただけなんです。地域で何かビジネスをやっていると思った時に、足りてないピースがクリエイティブだったので、そこで自分が動いていこうと。同じ経済活動やるのでも、生み出す幸せの総量を増やしていこうってことで、地元の言語がわかって、地元で貢献したいっていう思いのあるクリエイターと一緒にやったほうがいいだろうと思って、山根さんと一緒にやりはじめたって感じで。

吉浜 知輝さん
岩手県出身
宮古市地域おこし協力隊
2016年参加

山根 冬弥さん
岩手県出身
グラフィックデザイナー
2014年参加

井上 孝一朗さん
岩手県出身
滝沢市役所職員
2014年参加

熊谷 悠さん
岩手県出身
大学生
2017年参加

山根：出会ってからだよ、お互いプログラムに参加してたってわかったのは。

吉浜：そうそう。やっぱり地域で活動してると、出会った人がアラムナイだったっていうのは結構あって、その人脈は大きいですよ。みんな利己的ではないし、根底に地域に対する当事者意識があるってわかっているので、**余計な言葉がいらぬ。**

熊谷：私はプログラムに参加したときに、地域と一緒にアクションプランをやる手伝いをする大人が各グループについてくれたんですけど、その人たちが**とにかくよく見えて**。ちゃんと話を聞いてくれて、そう考えているんだ、じゃあ次どうする？って一緒に考えてくれる大人とそれまで出会ってこなかった。その大人たちが、地域で活動してたので、**私もそういうふうになりた**いって。でも、高校生の時は自分のアクションプランはできなかったんですよ。その悔しさもあって、大学生になってからまちづくりサークルを立ち上げました。

吉浜：今になって気づくんだけど、僕らが高校生の頃って、沿岸部は震災後にいろんな支援団体がガツと入ってきて、伴走支援とか場づくりとかをしてたから、高校生が活動できる場ってある程度用意されてたんだよ。でも、意外と内陸にはそれがなかった。(熊谷) 悠も高校生の時から、わざわざ沿岸部のイベントとかに参加してくれてたんだけど、なかなか取り組みにはつながらないっていうのは、そういう違いがあったよね。今、盛岡市とか一般社団法人いわて圏がアカデミックに高校生とまちづくりをつなげるってことをやり始めて、**おもしろくな**って来てると思う。

熊谷：それはあるかもしれないですね。私が活動していて改めて気づいたのは、私がやりたかったのは、「**地域づくり**」というより、**一緒にがんばれる仲間がいるっていう「場づくり**」のほうだったんだって。あと、「盛岡って遊ぶとこないしまらなよな」みたいに言ってる人がいると、「**ないんじゃないって、見つけられてないだけなんだよな**」と思っちゃう。そういう人たちが楽しみを見つけられる場づくりをしたいなって思うんですね。

プログラムは自分の原体験。 これを地域でできれば、 まちづくりの大きな力になる。

—— これからの10年の東北を考えて、やっていきたいことはありますか？

山根：クリエイティブの仕事をしていると、「**この地域にはデザインできる人がいないんだよ**」ってよく言われるんですよ。それってあまり良くないと思うので、地元でスキルを身につけたい人がいたら教えたり、一緒にやりたいと言う人がいたら一緒にやったり、っていう状況を作っていきたいと思っています。

吉浜：**地域には仕事はあるんだよ**、**掘り起こし次第で**。それを地域外に流すくらいだったら絶対地元で回したほうがいい。僕はこの3月に地域おこし協力隊を卒業して、クラフトビールの事業立ち上げを始めるんだけど、雇用であったり、一緒に何かやっていくクリエイターであったり、**地域で何かしたい人を吸い上げてい**たいなと思っています。

井上：今日改めて、どのように今の自分があるのかを整理できた気がします。プログラムで自分の強み弱みを考えたり、課題に対してとことん話し合っただけで行動してきたことが、**自分の重要な原体験**になっていたことを再確認しました。高校生の探究活動とかに関わっていく中で、もって高校生が「**地域のこの課題を解決したい!**」って思って、挑戦していきけるような、きっかけづくりや場づくりをしていきたいですね。きっとその原体験が高校生にとっての貴重な成長につながると思います。人口が減っていくからこそ、**意思をもって育つ人を増やしてい**きたい。あと、市役所に「こんなことやりたいんです!」って気軽に来てもらいたいですね。

吉浜：なかなかないっすよね。孝一朗さんみたいな市役所職員。

熊谷：今日は楽しかったです。なんか話を聞いて、もう一度がんばろうって思ってきました!

アメリカに留学中 将来は地元の役に立ちたい



プログラム中に「他人を頼りなさい」と言われたことが印象に残っています。帰国後は地元石巻で、高校生の声をまちづくりに生かす学生団体を立ち上げ、駅前の空き店舗を利用し、高校生が勉強できるスペースを運営しました。人を巻き込む力、自分から求める力は、現在アメリカで学ぶ上でも役立っています。

荒木田 道哉さん
岩手県出身
2019年参加 大学生

今は自分が高校生の アクションの伴走者に



帰国後、アクションプランとして福島でファーマーズマーケットを開催しました。地域と関わりをもち、様々な視点を学んだ経験でした。現在、教育系のNPOで働いており、Y-PLANの手法や大人として高校生に関わる際のスタンスは、自身の経験が直接生きています。

佐藤 勇樹さん
福島県出身
2016年参加
NPO職員

後にも先にも、 ガチで話せたのはあの時



今まで、自分の被災経験を誰かに話すことに悩んでいました。伝える側にとっても受け取る側にとってもセンシティブな内容だなと感じていました。だから、被災に関する自分の考えや気持ちも、誰にも言えないまま抱えていました。しかし、参加者の子達と話しているうちに「悩んでいたのは自分だけじゃないんだ」と気づくことができました。プログラム中、今まで言えなかった自分の本音をさらけ出してみたら、みんな全力で聞いてくれて、共感してくれて、一緒に考えてくれたんです。後にも先にも、あんなに自分の感情をさらけ出して話せたのは、あの時だけだと思います。なんでも話せる仲間と出会えたことで、私は一歩踏み出したような気がしています。

中村 天海さん
福島県出身
2018年参加 大学生

プログラム➡️イマノワタシ

気仙沼の子たちに 「世界」を見てほしい

私は、世界で活躍する同世代からすごく刺激をもらったんです。今、地元の気仙沼で、中学生の教育に携わる仕事をしています。子どもたちに多様な世界を知ってほしいですし、世界で活躍したいって夢を持てるようなサポートをしたいと思います。



三浦 亜美さん
宮城県出身
2013年参加
探究学習コーディネーター

負けず嫌いに 火がついた瞬間!

プログラム中、自分の考えをうまく表現できなかったんです。特に英語がわからず、自分の殻に閉じこもってしまいました。そんな経験が悔しくて、英語を猛勉強したんです。海外旅行やオンライン英会話で外国人と会話することで、「自分と人は違って当たり前だ」と気づき、性格や価値観に変化が生まれました。



大和田 日向子さん
福島県出身
2015年参加 中学校教員

アクションプランで より地元が大好きに!

プログラム中に、地元、石巻のことを多くの人に広めたいという思いが湧いてきました。アクションプランでは、地元の食材をPRするイベントの企画を行いました。そんな私の取り組みを知った高校の先生から、「地元食材を使った商品開発とPRイベント」を紹介してもらったんです。出店で大阪まで行った時、たくさんのお客さんから「高校生なのにすごい!頑張ってるね!応援してるから」と声をかけてもらって、すっごく元気づけられたんです。より地元が好きになって、地元に関わりたいという思いが一層強くなりました。プログラムを通じて、いろんな人と関わった経験が私の世界を広げてくれたなって感じています。

多様な考え方が刺激に! 自分の「当たり前」が変化



プログラム参加前は、地元よりも海外に強い関心があったんです。プログラムを通して、地元も面白いと気づきました。多様な考え方に触れたことで、「これしかない」という固定概念が、「違う考え方や視点もある」というふうに変わったんです。ここで得られた柔軟な考え方は、大学の研究でも生かしていきたいです。

後藤 莉子さん
宮城県出身
2019年参加 大学生

ビッグバンのように 世界が開けた



「同じ3月11日を経験したはずなのに、こんなに見えているものが違うんだ」多様な価値観と出会い、自分は世の中のことを知らないという事実を突きつけられた経験でした。アメリカで活躍する日本人と出会い、「好きなことを続けていいんだ」と思えたことが、今アメリカで3Dアニメーションの仕事をしていることにつながっています。

星 さくらさん
宮城県出身
2012年参加
3Dアニメーター



阿部 珠利亞さん
宮城県出身
2017年参加 大学生

プログラムで 出会った仲間が モチベーション

中一で被災し、人生が一変しました。一方で、震災がなければ得られなかったであろうチャンスもたくさん得られました。プログラムに参加したこともその一つです。今は私は地元岩手で記者の仕事をしています。学校で出会う友達とは別に100人の仲間がいて、世界の各地でがんばっているというのは、自分のモチベーションになっています。



吉田 美涼さん
岩手県出身
2014年参加 記者

つながり続ける同期の絆

「普通」に流されない みんなの人生

——まずは、今みなさんがどんなことしているのか教えてください。

後藤：おひさしぶりです！私は、**高校卒業後お金をためて留学したい**と思って、フリーターを2年してんですけど、ちょうどコロナで留学は難しくなりました。去年急に思い立って大学受験し、今は観光コミュニティ学部のコミュニティデザイン学科というところで、どうやって人と人のつながりを強めていけばいいかというのを、地域と観光の面から学んでいます。

浅沼：僕は、芸術文化学部というところで音楽を学んでいます。一応、**作曲家を目指しています。**

小野寺：おー！そーいや高校生のときから弾き語りしたりしてたよね。

浅沼：そうそう。プログラムの有志発表のとき、同じグループの軽音部でボーカルやってる女の子と組んで、どっからかギター借りてきて歌ったんだよね。

小野寺：僕は高校卒業後、1年浪人して経済学部に入りました。大学ではダンスサークルに入っています。

浅沼：充実した大学生活って感じだよな。

渡辺：私は今大学でフランス語を専攻しています。**初めて海外に行ったのがこのプログラムで**、それを機に地域や言語というものに興味を持ったので、それを両方学べる大学を選びました。あと、チアリーディングをやっていると、肩に2人ぐらい人乗せられます(笑)

後藤：すごすぎる(笑)

渡辺：実は、高校の時からチアをやるのが夢だったんだ。でも、小さい頃に股関節脱臼をしたせいで、足が開かなくてあきらめて。プログラムの選考のときに、「**新しいことに挑戦する**」っていう課題があったの覚えてる？私、あのとき「今まで体が硬いって諦めてたけど、毎日やってたら変わるかもしれない」って思って毎日ストレッチをするっていうのを始めたんだけど、**実はそれをいまだに続けてるの。**

——プログラムってみなさんにとってどんな経験ですか？

小野寺：中学受験して、いわゆる進学校と言われる中高一貫校に通っていたんです。なので、結構閉じたコミュニティで、勉強ができるっていうのが人生の尺度というか。それが、このプログラムに参加してみたら、**勉強できないは関係なく、「すごい」「優秀だな」って感じる人がゴロゴロいたんですよ。**行動力だったり、リーダーシップだったり、学校だったら周りの目を気にして行動しない人が多かったんですが、**ここだとみんなパンパン手挙げるし、思っていること発言するし。**それまでは成績に一喜一憂して生きてたんですけど、**こうやって生きたほうが楽しいじゃん、**って思えて、それから僕も自分から動くようになりましたね。

自然と刺激し合える存在

後藤：本当にこのプログラムで人生変わったし、あの3週間が今のわたしを作っているなって思う。プログラム中、アラムナイの話聞く機会があったの覚えてる？その方は高校生の時に突然親を亡くしてしまって、進路選択で悩んだ時に「どんなに苦しい状況にあってもやりたいことをやるんだ」と心に決めて、お母さんが生きてた頃には有り得なかった「留学」っていう進路を選ぶことで、お母さんの死に意味を与えようとしたんだよね。そうやって、**自分の人生って自分で決めていいんだ**ってそのとき初めて思って、感動したんだよね。その後のアメリカでのプログラムが楽しすぎたし、自分のいいところにも気づけたから、他の友達もみんな進学する中、フリーターしながら留学を目指すっていう道を選べたんだよね。

浅沼：俺は、理梨佳がそうやって自由に生きてる姿に**本当に刺激を受けたよ。**実は法学部受験して浪人してたんだけど、やっぱり音楽好きだし、一生やってくんだろうな、と思って。だったら「**やりたいことを素直にがんばろう**」って吹っ切れたんだよね。周りがいわゆる「普通」の道を選んで、それに流されそうになるときに、アラムナイの誰か今なにやってるって小耳に挟んで、「やっぱり尖っていくか」って思える。

後藤：何それ嬉しい(笑)

プログラムで出会った人は 他の友達とはちょっと違う

——アラムナイ同士はどんなふうに関わり合っていますか？

後藤：アラムナイのイベントとかもあるので、そういうときに顔出ししたり。今はコロナもあって、直接会える機会は限られているけど。

浅沼：自分がしんどいなって思うときとかに、**ちょっと話そうよ、って声かけられるのが、プログラムで出会った人。**やっぱり、他の友達とはちょっと違う。好きなことやってるし、気がついたら海外にいたりする人もいるし。

渡辺：私は高校生のときにアクションプランでイベントをやったんですけど、そのとき集客に苦労して……。100人にメッセージ送って20人くらいしかレスポンスがないとか、そういう切なさも経験してるので、誰かが発信したらなるべく反応するようにしてます。

——どんなことをやってたんですか？

渡辺：私の強みが、福島市内のおしゃれなお店を誰よりも知ってるってこと。だから、私が大好きな福島の魅力を他の人にも伝えられるように地図を作って、参加者が地図を手にお店を回って、写真を撮って自分だけのアルバムを作ろうっていう企画を考えました。

後藤：やってたやってた！そのとき遠くまでいけなかったけど、「友達がこんな面白いことやってるから行って〜！」ってSNSでシェアしたよ。

渡辺：本当？嬉しいー！

後藤：**実際に行動してる人は本当にすごいと思うから、絶対応援しようと思って。**プログラム中はそんなに前に出るタイプじゃなくても、帰国後しばらく経ってからアクションプラン実行している子もいて、ちゃんと思いを持ってたんだなって再確認して、感動する。

小野寺：アラムナイはお互いに刺激を与えあってるよね。

後藤：同窓会やったらすごいことになりそうだよな。

渡辺：100人集まったらすごいよね。一晩じゃ語り尽くせない。

——みなさんのアツイ絆が存分に伝わりました。ありがとうございました！



—— another point of view

「原点」に戻るアラムナイイベント
帰国後、TOMODACHIの別のプログラムに参加したり、TOMODACHIやソフトバンクでインターンシップをするアラムナイも多い。また、アラムナイイベントも定期的開催されており、仲間から刺激をもらったり、「原点」に戻る機会が用意されていて嬉しい、という声も多数聞かれた。

小野寺 朝飛さん
宮城県出身 大学生
2018年参加

渡辺 結加さん
福島県出身 大学生
2018年参加

後藤 理梨佳さん
福島県出身 大学生
2018年参加

浅沼 大葵さん
福島県出身 大学生
2018年参加

Q プログラムで出逢った友人は、あなたにとってどのような存在ですか？

※アラムナイアンケート調査より

家族のような存在で、絶対的味方!

東北について、いつでも熱く語り合える仲間

みんなが世界中にいると思うと頑張れるし、何かあったらお互いに助け合えるという安心感がある

自分を刺激し、モチベーションを引き出してくれる存在

夢を応援してくれる存在

地元が同じ友人達とは、それぞれやりたいことを仕事にしながらも、
一緒に地元を盛り上げていく仲間になれたらいいねと話しています

同じ東北出身で、いつかどこかで巡り会えると思うし、なにか東北で頑張りたいとき、同世代の知り合いがいることは強みです

本音で話せる仲間

EVENT REPORT

TOMODACHIソフトバンク アラムナイグリーティング

2023年2月26日 @WeWork日比谷

仲間たちが集まるイベントを、アラムナイが企画!

ソフトバンクでインターンを経験したメンバーが中心となって企画した本イベントでは、23人のアラムナイと関係者が集まった。「これからの東北の10年を考える」というテーマで行われたパネルディスカッションでは、プログラムでの活動を原点としたこれからのキャリアや、「特定の地域だけではなく人のために活動したい」といった思いが語られた。1期生から8期生の新たな繋がりを生み、これからもこのコミュニティを継続したいという想いを強くするイベントとなった。



わたしたちが企画しました

佐々木 勇士(1期) 岩田 萌(5期)
大橋 広佳(5期) 今野 瀬楠(5期)
吉浜 知輝(5期) 菅野 采颯(6期)

このイベントを通して、今までなかなか機会のなかった縦のつながりを提供したいと考えました。新たに知り合いになるアラムナイの方、元々知り合いの方も含めて、アラムナイのコミュニティを継続する事で、プログラムが終わっても繋がり続けることを実感していただけると嬉しいです。



Special Thanks

本プログラムを支えてくれた方々に心より感謝を申し上げます

University of California, Berkeley Center for Cities+Schools Y-PLAN 講師のみなさま

バークレー校で高校生たちの学びのサポートをいただきました。



アダルトアライのみなさま
高校生たちが地域で実践する際のサポーターとなり、行動を後押ししてくださいました。



Global Seedのみなさま
渡米研修でのあらゆる生活面のサポートをいただきました。



ホストファミリーのみなさま
高校生たちがアメリカの実生活を体験する機会をいただきました。



エアラインのみなさま

高校生が安全に渡米できるようチケットや空港でのサポートをいただきました。



ローラシアン協会のみなさま

選考、渡米、事後研修にいたるまで、高校生たちが安全にプログラムに参加できるようサポートいただきました。



今回の冊子制作に携わってくれたインターン生





わたしたちは、震災後の未来をつくる

Agent of Changeだ

変革の担い手

彼らがプログラムで得たのは「自分を変化を起こせる」という小さな、しかし確固たる自信である。その自信を持って、ある参加者は大人を巻き込みながらまちに高校生の居場所をつくり、ある参加者は海外にさらなる学びの場を求めた。今、世界のどこかで散り散りになっている1000人のアラムナイは、おかれたコミュニティの中で小さな変化を起こし続けている。

変化は連鎖して、大きな渦になり、世界を動かしていくだろう。米国研修で、繰り返し言われた言葉がある。「あなたたちは傍観者になってはいけない。当事者だからこそ、世界を変えられるのだ」彼らはAgent of Change(変革の担い手)として、次の時代を力強く切り開いていく。

